375.9
Se14
資料室

千田憲著

中等國文典

初學年用

東京
右文書院

教科書文庫
41
200

41851
教科書文庫
4
815
41-1931
20000
44034

教科書文庫
4
815
41-1931
2000044034

昭和六年十二月四日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科

中等國文典

初學年用

千田憲著

東京 右文書院

広島大学図書
2000044034

資料室
375.9
Se14

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 44634 圖書

中等國文典 初學年用 目次

第一章 總說……一
第二章 語の性質……四
第一節 名詞……四
第二節 數詞……五
第三節 代名詞……五
第四節 動詞……八
第五節 形容詞……九
第六節 副詞……一〇
第七節 接續詞……一二
第八節 感動詞……一三

第九節　助動詞……一四
第十節　助詞……一七
第三章　語の活用……二〇
第一節　文語動詞……二〇
一　活用……二〇
二　活用の名稱……二二
三　活用の種類……二五
四　形容動詞……三五
第二節　口語動詞……三七
第三節　形容詞……四三
活用……四三
第四節　音便……四六
第五節　文語助動詞の種類・接續及び活用……四九

第六節　口語助動詞の種類・接續及び活用……七二
第四章　助詞……八四
第一節　體言に續く助詞……八四
第二節　動詞・形容詞・助動詞に續く助詞……八七
第三節　種々の語に續く助詞……九三
第五章　語の構成と品詞の轉成……一〇一
第六章　文の成分……一〇五

附錄

表

第一表　代名詞一覽表
第二表　動詞活用一覽表

第三表　助動詞活用一覽表
第四表　文語、動詞助動詞連續一覽表
第五表　口語、動詞助動詞連續一覽表

中等國文典　初學年用　目次　終

廣島大學圖書之印

中等國文典　初學年用

第一章　總說

單語

櫻。

犬。

咲く。

走る。

右の四つの語は、皆それぞれ或意味を表してゐて、これ以上に分ける事の出來ない言葉の單位である。このやうに、或意味を表してゐる言葉の單位を單語といふ。

櫻咲く。

犬走る。

右の二例は、いづれも二つの單語が集まつて、一つの纏まつた思

文

想を表したものである。このやうに、幾つかの單語が集まつて、一つの纏まつた思想を表したものを**文**といふ。

一　櫻咲きて樂しき春となりぬ。（單語の數八つ）

二　櫻が咲いて樂しい春になりました。（單語の數十）

文語口語

文には右の一の例のやうに、主として在來の記錄の上で用ゐられた文體と、二の例のやうに、日常の談話のままに書き表すのに用ゐられる文體との二種がある。一を**文語**といひ二を**口語**といふ。

言葉は多くの人々に共通に用ゐられるものであるから、そこに一定の法則が無ければ、これを用ゐてお互がその思想を正確に傳へたり、又は理解したりする事が出來ない。この法則を**文法**といふ。

文法

文語に存する法則を**文語文法**（略して**文語法**）、口語に存する法則を**口語文法**（略して**口語法**）といふ。

文語法

口語法

單語をその意味、形、職能の上から次の十種に分ける。そしてその各々を**品詞**といふ。

品詞の分類

一　名詞　二　數詞　三　代名詞　四　動詞　五　形容詞　六　副詞　七　接續詞　八　感動詞　九　助動詞　一〇　助詞

練習

次の文を單語に分けたら幾つになるか。

イ　鳥鳴く。

ロ　美しき花咲く。

ハ　日暮れ月東山の頂に出づ。

ニ　子供が花を折る。

ホ　僕は毎朝七時に學校へ行く。

ヘ　東京の兄から手紙が屆いた。

ト　松島・宮島・天の橋立を日本の三景といひます。

チ　僕は四月から中學生になりました。

第二章　語の性質

第一節　名詞

名詞

文語

櫻咲く。

山には木多し。

秀吉朝鮮をうつ。

口語

これは歴史の本です。

瓢箪から駒が出る。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名を表す語を**名詞**といふ。

固有名詞

秀吉・**朝鮮**のやうに、一つのきまつた事物に限つて用ゐられる名詞を**固有名詞**といひ、**山**・**木**などのやうに、同じ種類の事物に廣く通じて用ゐられる名詞を**普通名詞**といふ。

第二節　數詞

數詞

文語

一寸の蟲にも五分の魂。

寺古りて梅二三本、月あらば更によし。

千里の道も一歩より始まる。

口語

第一號から第三十號までが合格です。

一月ばかり雨が降らない。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の數量又は順序を表す語を**數詞**といふ。

第三節　代名詞

文語

口語

代名詞
人代名詞
指示代名詞

我は彼がいづこの誰なるかを知らず。

あの品はどこにも無い。

百姓は山のあつちへ歸つて行きます。

これは飛行機の模型なり。

右の例の傍線を施した語のやうに、名詞の代りに用ゐられる語を**代名詞**といふ。

我・**彼**などのやうに、人の名の代りに用ゐられる代名詞を**人代名詞**といひ、**これ**・**どこ**・**あつち**などのやうに、事物・場所・方向の名の代りに用ゐられる代名詞を**指示代名詞**といふ。

人代名詞の中、**我**・**わたくし**のやうに自己を呼ぶものを**自稱**(第一人稱)、**汝**・**あなた**のやうに相手を呼ぶものを**對稱**(第二人稱)、**彼**・**このかた**のやうに第三者を呼ぶものを**他稱**(第三人稱)といふ。

他稱には、その遠近によつて、**近稱**・**中稱**・**遠稱**などの區別があり、又**誰**・**どなた**のやうに、定まつてゐないものを呼ぶのを**不定稱**といふ。

指示代名詞にも、その指示する場合によつて**近稱**・**中稱**・**遠稱**・**不定稱**の區別がある。

代名詞は文語と口語とによつて、趣の異なるものがある。附錄の第一表を見なさい。

體言

名詞・數詞・代名詞は事物の本體を表す語であるから、これを**體言**といふ。

練習

次の文中の名詞・數詞・代名詞を指摘しなさい。

イ 東京は日本の首府なり。

ロ 菜の花や月は東に日は西に。

ハ 熱田の社を左に見て春風に吹かれゆけば、名古屋の城は、まがはぬ影を見せたり。

ニ 私の部屋は東の六疊にて、文雄君と二人机をならべをり候。

ホ この人かの花を詠じて、花と人と千古に芳し。

ヘ　二時十分、今まで鯨に引かれてゐたニコライ丸は、愈〻反對に鯨を引きよせることとなつた。

ト　それは僕の帽子だ。君がまちがへたのだらう。

第四節　動詞

文語

鳥空を飛ぶ。

東に日本あり、西に英國あり。

口語

僕は朝早く起きる。

玄關前に櫻の大木がある。

右の傍線を施した語のやうに、事物の動作又は存在を表した語を動詞といふ。

練習

次の文中の動詞を指摘しなさい。

イ　風吹きて花雪の如く散る。

ロ　笑ふ門には福來る。

ハ　松風清き夕浪に、月もよせくる須磨の浦、關屋は跡も殘らねど、人の心やとまるらむ。

ニ　鳥が一羽、西空を慕ふやうに飛んで行つた。僕はしばしその行方を見守つてゐたが、その影が森の方に消えると、しみじみと迫る寒さを思ひだして、田の畦を歩んだ。

第五節　形容詞

文語

松青く、砂白く、風景美しき所なり。

梅檀は二葉より芳し。

口語

美しい花が谷間に咲いてゐる。

夏は暑く冬は寒い。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の性質や狀態などを表

形容詞
用言

す語を**形容詞**といふ。

動詞、形容詞は事物の作用を表す語であるから、これを**用言**(ようげん)といふ。

練習

次の文中の形容詞を指摘しなさい。

イ 高き山の麓に廣き野見ゆ。

ロ 風はます〳〵烈しく、雨はいよいよ強し。

ハ 遠き慮なきものは必ず近き憂あり。

ニ つめたい夜氣がしつとりと肌にふれて、あたりは寂しいほど靜かであつた。

ホ 鐘の音が止んで、鷄の聲がする。何だか鷄の聲まで樂しく心地よく聞える。まだほの暗い。

第六節　副詞

副詞

文語

一　風そよそよと吹く。

二　雨いよいよ強く、雷鳴ますます烈し。

口語

空が俄に曇る。

この花は大層美しい。

右の例の中で一の**そよそよ**とは動詞**吹く**の意味を限定し、**俄に**は動詞**曇る**の意味を限定してゐる。二の**いよいよ**は形容詞**強く**の意味を限定し、**ますます**は形容詞**烈し**の意味を限定し、**大層**は形容詞**美しい**の意味を限定してゐる。かやうに、動詞・形容詞(即ち用言)の意味を限定する語を**副詞**といふ。

副詞は又、他の副詞の上に添うてその意味を限定する事もある。

文語

更に一層つとめよ。

やや暫く待つ。

口語

大變上手に書きました。

第七節　接續詞

文語

書を讀み而して字を習ふ。
文を學び或は武を講ず。
見渡す限り山又山なり。

右の例の傍線を施した語のやうに、語句や文章を接續する語を**接續詞**といふ。

口語

國語・英語及び數學の三科目に力を注いでゐる。

練習

一　次の文中の、副詞・接續詞を指摘しなさい。

イ　燈火かすかに見ゆ。
ロ　臺灣は氣候暖し、故に一年中雪を見ず。
ハ　雨ますます烈しく、殆ど進退に窮せり。
ニ　春もやや景色ととのふ月と梅。
ホ　あの白いのは花だらうか、それとも雲だらうか。
ヘ　兄は大阪へ行き、それから神戸、須磨へ行つた。

二　次の副詞・接續詞を用ゐて短い文を作りなさい。

いかにも。然れども。ひらひらと。甚だ。特に。だんだん。ところが。

第八節　感動詞

文語

あら面白や。
ああ悲しいかな。
あはや味方の陣危きぞ。

右の例の傍線を施した語のやうに、感動の意を表す語を**感動詞**といふ。

口語

おや珍しいこと。
ええ口惜しい。
いや知りません。

練習

一　次の文中の感動詞を指摘しなさい。

イ　あつぱれ勇ましき武者ぶりかな。

ロ　すは火事よと騒ぎぬ。

ハ　やよ待てしばし

ニ　はい承知しました。

ホ　そら風が吹いて來たぞ。

二　知つてゐる感動詞を使つて、短文を作りなさい。

第九節　助動詞

文語

花はすでに散りたり。

歳月人を待たず。

口語

本がまだ屆かない。

人からよく言はれる。

明日は雨となるべし。

右の例の傍線を施した語のやうに、主として動詞の下について、その意味を助ける語を**助動詞**といふ。

助動詞の中には、體言や形容詞などに添ふものもある。

文語

軍人は國家の干城たり。

太郎の成績は常に第一位なり。

學校中の雄辯家は彼なり。

性質はよきなり。

助動詞の中には、**の**・**が**の下に添ふものもある。

落花雪のごとし。

水の流るるがごとし。

口語

明日は早く起きよう。

あの人は音樂家だ。

……第一位です。

……彼です。

助動詞は又他の助動詞と重ねて用ゐられる事も多い。

文語

日本外史を讀ましめられたり。

楠木正成は忠節なる人なりき。

口語

母校の運動會に誘はれた。

練習

次の文中の助動詞を指摘しなさい。

イ 昔ギリシャにスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇のほまれ今なほ高し。

ロ めくら蛇におぢず。

ハ 瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。

ニ 生徒は學則を守るべし。

ホ よき習慣を養はしむる必要あるなり。

ヘ 熱した汗の點滴が、冷たい線になつて胸を流れる。

ト 先生もこの會に御出席くださるさうだ。

第十節　助詞

文語

は本を讀む。

歳年經れども、綠の色

口語

花が咲き、鳥が鳴く。

運動すれば、丈夫にならう。

ず。

傍線を施した語のやうに、種々の語について、その意味他の語との關係を表す語を**助詞**といふ。

の數が多い。今用法の上から三類にわけて、その主なを挙げる。

續く助詞

へ・と・より・から・まで。

助動詞に續く助詞

ども・に・を・が・て・で・つ・つ・ながら・ば・や・なむ・など

品に續く助詞

む・こそ・や・か・ばかり・のみ・だに・さへ・すら・かな・よ・かし

習

の助詞を指摘しなさい。

散りみだる。

そ物の上手なれ。

ますます濃く、菜の花も咲きそめ、田の畔の野茨も簇々と芽を

ぬ。

上に苦青う松の落葉かな。

降ると寒くなる。

或日の夕方近く、高山町を見下す高い城山公園を散歩した時の

は、なかなか忘れられない。

車の窓はるかに北にふるさとの山見えくれば襟を正す。

二 次の文について、各品詞を指摘しなさい。

イ それより綏靖・安寧二天皇の御陵を拜みて、長谷の方へと志す。

ロ 釜山の浦の秋更けて、空もしぐるる夕まぐれ、波路はるかに帆をあげて、汝とはとはに別るべし。

ハ それとなく郷里のことなど語り出でて秋の夜に燒く餅の匂かな。

ニ 春の日はきのふの如く暮れて、折折の風に誘はれる花吹雪が、臺所の腰障子の破れから飛びこんで、手桶の中に浮ぶ。

ホ 田舍の朝の空氣は全くいい。その空氣の中で毎朝深呼吸をすると、肺の底まで匂ふかと思ふ。

ヘ 青梅が三つ、つぶらになつてゐるのが目だつ。その他にもなつてゐるであらうが、青葉に隱れて見えぬ。

ト 毎年夏になつて、そろそろ夕方の風が戀しいころになると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が、中庭へ持出される。

第三章　語の活用

第一節　文語動詞

一　活用

〔語尾〕
か（むばず）
き（たり）
く
く（時）
け（ども）
け

〔語幹〕
（花）咲

〔語尾〕
け（むばず）
け（たり）
く
くる（時）
くれ（ども）
け（よ）

〔語幹〕
（教を）受

右の例のやうに、動詞はその用ゐ方によつて、いろいろに語形が

語幹
語尾
活用

變化する。そこで動詞を變化する部分と、變化しない部分とに、分けてみる事が出來る。その變化しない部分を**語幹**（ごかん）といひ、變化する部分を**語尾**（ごび）といひ、その變化することを**活用**（くわつよう）といふ。

動詞の活用は、五十音圖の一行内に於て**六**種に行はれるのが原則である。

練習

次の文中の動詞を指摘して、語幹と語尾とに分けなさい。

イ　歌へども心慰まず。
ロ　暑を海濱に避けたり。
ハ　敝衣を着れども恥ぢず。
ニ　日落ちぬ。石垣に腰かけ足を垂れつつ釣る。
ホ　世の進むに從ひて、分業行はる。
ヘ　咲きつづく菫たんぽぽなつかしみもとこし道をまたもどりけり。
ト　里人はこれをいひ傳へ、名和が約束の松と呼びて、今に話し傳へたり。

二　活用形の名稱

動詞の語尾は活用して六種となり、その各〻に特殊の用法がある。

第一活用形　未然形

咲か（むばず）　受け（むばず）

この形は多くず・ば・むなどに連つて、動作のまだ成立せぬ意味を表す形であるから、これを未然形といふ。

第二活用形　連用形

咲き（たり 殘る）　受け（たり つぐ）

この形は多く活用する語に言ひつづける形であるから、これを連用形といふ。

第三活用形

咲く　受く

終止形

この形は多く文の意味を言ひきる形であるから、これを終止形といふ。

第四活用形　連體形

咲く（時）　受くる（時）

この形は多く體言に言ひつづける形であるから、これを連體形といふ。

第五活用形　已然形

咲け（ども）　受くれ（ども）

この形は多くど・どもなどに連つて、動作の既に成立した意味を表す形であるから、これを已然形といふ。

第六活用形　命令形

咲け　受け（よ）

この形は命令の意味を表す形であるから、これを命令形といふ。

練習

次の文中の動詞を指摘し、どの活用形が用ゐられてゐるかを答へなさい。

イ 友と旅行をす。

ロ 風吹かば花散らむ。

ハ 雨ふりいづ。

ニ 瀬戸内海は到る處に岬あり、灣あり。

ホ 松柏の老樹を植ゑこまむとて、諸所にこれを求めたり。

ヘ よく泳ぐ者はよく溺る。

ト 年々に思ひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり。（助動詞）

チ 人いかに笑ふとも、自ら守る所かたく、行道にたがはずば、何の恥づる事かこれあらむ。

リ 今日は差支あり、明日早くこよ。

ヌ 虎嘯（うそぶ）けば風起る。

四段活用

三　活用の種類

動詞の語尾が五十音圖の幾段にわたつて變化するかによつて、動詞の活用は九種類に分けられる。

一　四段活用　次の例のやうに、動詞の語尾が、同じ行のア・イ・ウ・エの四段にわたつて活用するものをいふ。

動詞	語幹	語尾					
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
咲く	さ	か	き	く	く	け	け
歌ふ	うた	は（ア段）	ひ（イ段）	ふ（ウ段）	ふ（ウ段）	へ（エ段）	へ（エ段）

カ行四段活用

ハ行四段活用

練習

次の動詞を活用させてみなさい。

賣る。吹く。讀む。漕ぐ。打つ。飛ぶ。推す。待つ。習ふ。休む。去る。

上二段活用

二 上二段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のイ、ウの二段にわたつて活用し、且連體形にる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹	語尾					
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
起く	お	き	き	く	くる	くれ	き
朽つ	く	ち	ち	つ	つる	つれ	ち
		イ段		ウ段			イ段

カ行上二段活用
タ行上二段活用

下二段活用

練習 次の動詞を活用させてみなさい。

落つ。強ふ。老ゆ。試む。盡く。亡ぶ。生く。閉づ。錆ぶ。

三 下二段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のウ・エの二段にわたつて活用し、且連體形にる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹	語尾					
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
避く	さ	け	け	く	くる	くれ	け
教ふ	をし	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ
		エ段		ウ段			エ段

カ行下二段活用
ハ行下二段活用

上一段活用

練習 次の動詞を活用させてみなさい。

流る。受く。枯る。寄す。責む。捨つ。尋ぬ。交ず。染ゆ。出づ。

四 上一段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のイ段にだけ活用し、且終止形・連體形にる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹	語尾					
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

着る（着）	き	き	きる	きる	きれ	き
煮る（煮）	に	に	にる	にる	にれ	に

イ 段

カ 行上一段活用
ナ 行上一段活用

上一段活用に屬する動詞は右の例の外、次の十數語に過ぎない。

射る。鑄（い）る。似る。干（ひ）る。見る。（顧みる。惟みる。鑑みる。試みる）居（ゐ）る。率ゐる。用ゐる。

下一段活用

五 下一段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行の**エ**段にだけ活用し、且終止形・連體形に**る**、已然形に**れ**の添はるものをいふ。

動詞	語幹	語尾				
蹴る（蹴（け））	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	け	け	ける	ける	けれ	け

エ 段

下一段活用の動詞は蹴**る**の一語だけである。

變格活用

以上の五種類の活用を、以下に述べる四種の變格（へんかく）活用に對して、**正格活用**（せいかくくわつよう）といふ。

正格活用

六 カ行變格活用 次の例のやうに、動詞の語尾が**カ**行の**イ・ウ・オ**の三段にわたつて活用し、且連體形に**る**、已然形に**れ**の添はるものをいふ。

カ行變格活用

動詞	語幹	語尾				
來（く）（來（く））	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	こ	き	く	くる	くれ	こ

オ 段　**イ** 段　**ウ** 段　**オ** 段

カ 行變格活用の動詞は**來**（く）の一語だけである。

サ行變格活用

七 サ行變格活用 次の例のやうに、動詞の語尾が**サ**行の**イ・ウ・エ**の三段にわたつて活用し、且連體形に**る**、已然形に**れ**の添はるものをいふ。

ナ行變格活用

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
爲(す)	(爲(す))	せ	し	す	する	すれ	せ
		エ段	イ段	ウ段			エ段

語尾

サ行變格活用の動詞は本來爲(す)の一語であるが、他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。次にその例をあげる。

罪す。勉强す。心地す。講ず。審(つまびら)かにす。

八 ナ行變格活用 次の例のやうに、動詞の語尾がナ行のア・イ・ウ・エの四段にわたつて活用し、且連體形にる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死ぬ	死(し)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
		ア段	イ段	ウ段			エ段

語尾

ラ行變格活用

ナ行變格活用の動詞は死ぬ・往(い)ぬの二語であるが、往ぬは現代文ではあまり用ゐられない。

九 ラ行變格活用 次の例のやうに、動詞の語尾がラ行のア・イ・ウ・エの四段にわたつて活用し、イ段で言ひきるものをいふ。

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
有り	有(あ)	ら	り	り	る	れ	れ
		ア段	イ段	ウ段	エ段		

語尾

ラ行四段活用の動詞の終止形はウ段(る)であるが、**ラ行變格活用**の動詞の終止形はイ段(り)である。この點だけが兩者の相違である

	動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ラ行四段活用	取る	と	ら	り	る・	る	れ	れ
ラ行變格活用	有り	あ	ら	り	り・	る	れ	れ

語尾

ラ行變格活用の動詞には**有り**の外に**居り**(を)・**侍り**(はべ)の二語があるが、**侍り**は現代文では餘り使はれない。

注意――**四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用**以外の活用の動詞の命令形には、普通助詞の**よ**をつけて用ゐる。

動詞の活用の識別法

さて、ある動詞が如何なる活用に屬するかを識別する簡便な方法を次に述べよう。

一 上一段活用、下一段活用及び四種の變格活用の動詞は、その數が少いから、これを諳記する。

二 その他は次のやうな方法によつて、その種類を見分ける。

動詞の語尾
- **ア段**にずが續くもの――**四段活用**　例　咲か(ア段)ず。
- **イ段**にずが續くもの――**上二段活用**　例　恥ぢ(イ段)ず。
- **エ段**にずが續くもの――**下二段活用**　例　避け(エ段)ず。

練習

一 次の文中の動詞を指摘して、どの活用形が用ゐられてゐるかを述べ、且活用させてみなさい。

イ 我が國が世界に卓絶せる國體を保ち、上下三千年の國家を繼ぎて、こに新運を開き、列國と對峙するに至れること、誠に故あるかな。

ロ 木の根に培(つちか)ひ水そそぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず炎暑にも枯れずして、枝葉・花實、時に從ひ茂り榮ゆるなり。

ハ ちろ〳〵と岩つたふ水に這ひあがる赤き蟹ゐて杉の山靜か。

ニ かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かく荒れはてたる小堂に、風雨をだに防ぎかねて、彩色も落失せ、僧だに守らで、香花を供する人もなく、年月に荒れゆき、遂に跡かたもなくなりはて、これ等の事を

も語り傳ふる人もなくならむかと、あまりにあはれに覺えしかば、委しく書きつけて歸れり。

二 次の文中に誤があつたら、正しなさい。

イ 老ひたるをも若きをも率いて、敵にむかいたり。

ロ 花は咲けども、雪は消えず。

ハ 學問は重き荷を負いて坂を攀づるが如し。

ニ 雨滴も絶へざれば、石を穿つ。

ホ 棄てる神あれば、助ける神あり。

ヘ その行、感づるに堪えたり。

ト 明治神宮に詣ずるもの、廣前の松に思を致す所なかるべけんや。

三 次の文の空所を補ひなさい。

イ 後に悔のとも及ばじ。

ロ 庭には萩數株を植たり。

ハ 爲すある人には、如何なる場合も我が力を試るに足るべきなり。

二 皇統連綿榮に榮る祖國の輝き。

ホ 砲臺を構へて、大砲を据つく。

四 次の動詞の各活用形を使つて短文を作りなさい。

選ぶ。得。支ふ。練習す。暮る。

四　形容動詞

一 水清かり。風烈しかり。

二 波靜かなり。冬暖かなり。

三 前途洋々たり。風采堂々たり。

右の例の傍線を施した語は、事物の性質や狀態を表してゐる點では、形容詞の性質を帶びてゐるが、その活用はラ行變格活用動詞と同じであるから、この種の語を特に**形容動詞**と名づけてゐる。

一は形容詞の連用形に、ラ行變格活用の動詞ありが結びついて清くあり――清かり　烈しくあり――烈しかり

となつたものである。

二は、**靜かに**・**暖かに**、などといふにの結びついた副詞に、ラ行變格活用の動詞**あり**が結びついて

靜かにあり——靜かなり　暖かにあり——暖かなり

となつたものである。

三は**洋々と**・**堂々と**などいふとの結びついた副詞に、ラ行變格活用の動詞**あり**が結びついて

洋々とあり——洋々たり　堂々とあり——堂々たり

となつたものである。

形容動詞の活用

形容動詞の活用

語幹	語尾					
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
清か 靜かな 洋々た	ら	り	り	る	れ	れ

四段活用

練習

次の文中の形容動詞を指摘し、且活用させてみなさい。

イ 遠からむ者は音にも聞け、近からむ者は目にも見よ。

ロ 溫和なる氣候は國民の性質を穩健ならしむ。

ハ 夏涼しくして、冬暖かなり。

ニ 天黑くして四邊暗澹たり。

ホ 二つ三つ摘み殘されし綿の實の色寒げなり冬の山里。

第二節　口語動詞

口語動詞の活用には、**四段活用**・**上一段活用**・**下一段活用**・**カ行變格活用**・**サ行變格活用**の五種がある。

一　四段活用　文語の四段活用と同樣に活用する。文語のナ行變格活用・ラ行變格活用は、口語では四段活用になる。

上一段活用

動詞	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
*口 咲く	さ	か	き	く	く	け	け
*文 咲く	さ	か	き	く	く	け	け
口 死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬ・	ね・	ね
文 死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬ・る・	ぬ・れ・	ね
口 有る	あ	ら	り	る・	る	れ	れ
文 有り	あ	ら	り	り・	る	れ	れ

（*口は口語の略、*文は文語の略、以下同様）

（口）死ぬ人　死ねば……　書物がある。

（文）死ぬる人　死ぬれば……　書籍あり。

練習

次の動詞を活用させてみなさい。

居る。押す。

二 上一段活用

文語の上一段活用と同様に活用する。文語の

下一段活用

上二段活用は口語では上一段活用となる。

動詞	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
口 着る	き	き	き	きる	きる	きれ	き
文 着る	き	き	き	きる	きる	きれ	き
口 起きる	お	き	き	きる・	きる・	きれ・	き
文 起く	お	き	き	く・	く・る・	く・れ・	き

（口）早く起きる。　早く起きる人　早く起きれば

（文）早く起く。　早く起くる人　早く起くれば

練習

次の動詞を活用させてみなさい。又右の例にならつて、口語・文語兩樣の活用を表に書きなさい。

報いる。落ちる。過ぎる。居る。

三 下一段活用

文語の下一段活用と同樣に活用する。文語の下二段活用は口語では下一段活用となる。

	動詞	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
口	蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	ける	け
文	蹴る		け	け	ける	ける	ける	け
口	受ける	う	け	け	け・る	け・る	け・れ	け
文	受く		け	け	く・	く・る	く・れ	け

下二

下二

（口）賞を受ける。賞を受ける人賞を受ければ

（文）賞を受く。賞を受くる人賞を受くれば

練習

次の動詞を活用させてみなさい。又右の例にならつて、口語・文語兩樣の活用を表に書きなさい。

撫でる。告げる。交ぜる。植ゑる。

四 カ行變格活用 文語のカ行變格活用と同じく、口語でもイ・ウ・オの三段にわたつて活用するが、ただ口語では終止形にるが添はる點が違ふ。

カ行變格活用

	動詞	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
口	くる	(來)	こ	き	く・る	くる	くれ	こ
文	く		こ	き	く・	くる	くれ	こ

（口）人がくる。

（文）人く。

五 サ行變格活用 文語のサ行變格活用と同じく口語でもイ・ウ・エの三段にわたつて活用するが、口語では終止形にるが添はり、未然形・命令形にせの外に別にしに活用する點が違ふ。

サ行變格活用

	動詞	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
口	する	(爲)	せ・し・	し	す・る	する	すれ	せ・し・
文	す		せ	し	す・	する	すれ	せ

（口）病氣をせぬ。病氣をしない。病氣をする。勉強せよ。勉強しろ。

（文）病氣をせず。病氣をす。勉強せよ。

注意——上一段・下一段・サ行變格活用の動詞の命令形には助詞よ又はろを添へる。カ行變格活用の動詞の命令形には助詞いを添へる。

練習

一　次の文を口語に直してみなさい。

イ　歩を返して木蔭を過ぐるに、燈光のかげ木の間を洩れて、人の夜涼に語るあり。

ロ　財貨は盡くることあれども、芳名は朽つることなし。

ハ　珍客來ればとて、置物おき、掛物かけなどす。

ニ　人はパンのみにて生くる者にあらず。

ホ　黒雲見ゆ。やがて風吹かむ。

二　次の動詞について、口語か文語かを分けなさい。

傳へる。下りる。飛ぶ。志す。据ゑる。親しむ。改まる。違へる。

叫ぶ。見ゆ。

口語の形容動詞は

暖かなら行きませう。

暖かな日です。

のやうな用法が少しあるだけで、完全な活用形は備つてはゐない。

第三節　形容詞

活用

形容詞の活用は五十音圖の同一行の間に行はれずに、カ行・サ行の兩行に跨つて行はれる。

文語形容詞の活用は二種あつて、**ク活用**・**シク活用**と名づける。

一　ク活用

形容詞	語幹	語尾				
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
清し	清	く	く	し	き	けれ

二　シク活用

形容詞活用形の名稱

形容詞	語幹	語尾				
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
新し	新（あたら）	しく	しく	し	しき	しけれ

形容詞の活用形の名稱は、動詞の活用形の名稱に準じてつけたのである。今次に其の用例を示す。

ク活用

（未然形）水清くば魚住まじ。
水清くとも魚住まむ。
（連用形）水清く流る。
（終止形）水清し。
（連體形）水清き流あり。
（已然形）水清ければ魚住まず。
水清けれども魚住みたり。

シク活用

品新しくば我買はむ。
品新しくとも我は買はじ。
新しく作りいだす。
品新し。
品新しき店あり。
品新しければ價高し。
品新しけれども安價なり。

口語形容詞の活用

口語の形容詞の活用は、未然形を缺く點及び終止形・連體形が文語の活用と違ふ。

形容詞	活用	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
口 清い	ク活	清（きよ）	○	く	い・	い・	けれ
文 清し			く	く	し・	き・	けれ
口 新しい	シク活	新（あたら）	○	しく	しい・	しい・	しけれ
文 新し			しく	しく	し・	しき・	しけれ

（口）水が清い。　清い水　この本は新しい。　新しい本

（文）水清し。　清き水　この本は新し。　新しき本

練習

一　次の文中の形容詞を指摘し、どの活用形が使はれてゐるか述べなさい。

（文）イ　風烈しければ、波高し。

（口）ロ　朱に交れば赤くなる。

（文）ハ　こころよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり。

ニ　淋しければ二人でゆけ。

ホ　これは舊く買つた帽子だ。

ヘ　品がよければ買はう。

ト　新しい品はよいが餘り高い。

チ　暑い寒いも彼岸まで。

二　次の形容詞の各活用形を用ゐて短文を作りなさい。

おもしろい。青し。やかましい。易し。ふさはしい。恐ろし。寒い。大きい。繁し。難し。

第四節　音便

音便

語と語とが連る時、發音の便宜上或音が他の音に轉ずることがある。これを音便と名づける。こゝでは、動詞・形容詞が他の語に連る時あらはれる音便を一括して述べる。

動詞の音便

動詞の音便　四段・ナ行變格・ラ行變格活用の動詞の連用形に於て表れ、次の四種がある。

イ音便

一　イ音便　活用の語尾がいに轉ずるもの。

鳴きて　鳴いて（文語・口語）

仰ぎて　仰いで（文語・口語）

仰しやります。　仰しやいます。（口語）

ござります。　ございます。（口語）

ウ音便

二　ウ音便　活用の語尾がうに轉ずるもの。

爭ひて　爭うて（文語・口語）

問ひて　問うて（文語・口語）

買ひて　買うて（文語・口語）

買うた（口語）

撥音便

三　撥音便　活用の語尾が撥音んに轉ずるもの。

死にて　死んで
飛びて　飛んで
踏みて　踏んで　（文語・口語）

四　促音便　活用の語尾が促音つに轉ずるもの。

勝ちて　勝つて
思ひて　思つて
取りて　取つて　（文語・口語）
有りて　有つて

形容詞の音便　次の二種がある。

一　イ音便　連體形の語尾のきがいに轉ずるもの。

善きかな　善いかな。
美しき花　美しい花。　（文語）

二　ウ音便　連用形の語尾のくがうに轉ずるもの。

促音便

形容詞の音便

イ音便

ウ音便

全くす　全うす。　（文語）
美しく咲く。　美しう咲く。　（文語・口語）

練習

次の文に誤があつたら、正しなさい。

イ　任重ふして、道遠し。
ロ　朝には星を戴いて出で、夕には月を踏んで歸る。
ハ　負ふた子に髪なぶらるる暑さかな。
ニ　飛むで火に入る夏の蟲。
ホ　一を聞ひて十を知る。
ヘ　あの山は嶮しふございます。
ト　人が何と言うても聞きいれない。

第五節　文語助動詞の種類・接續及び活用

一　受身の助動詞。

受身の助動詞

犬、人に打たる。

犬、人に蹴らる。

右の例の傍線を施した助動詞る・らるは、動作を他から受ける意味を表すから、これを受身の助動詞といふ。

るは四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用の動詞の未然形に續き、らるは、その他の活用の動詞の未然形に續く。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ

（動詞の下二段活用に等しい）

接續

可能の助動詞

二 可能の助動詞

船にても汽車にても行かる。

この問は誰にも答へらる。

腰間の秋水鐵をも斷つべし。

右の例の傍線を施した助動詞、る・らる・べしは、或動作をなすことが出來る意味を表すから、これを可能の助動詞といふ。

可能の助動詞る・らるが動詞に接續する規定は、受身の助動詞る・らるとと同じであるが、活用には命令形を缺いてゐる。

べしは、動詞の終止形に續く。但しラ行變格活用の動詞には、その連體形に續く。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○

（形容詞のク活用に等しい）

接續

活用

可能の助動詞は、動作が自然に起つて來て止められぬ意味を表すことがある。これを特に自發の助動詞といふ。

亡き人の事のみ思はる。

自發の助動詞

行末案ぜらる。

練習

一 次の文中の助動詞を指摘して、その種類を述べ、接續を說き、且助動詞のどの活用形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 花は櫻木の諺思ひいでらる。

ロ 規則を犯して罰せらるる者多し。

ハ 善き行をして人に譽められよ。

ニ 一時間に十枚も讀まるればよき方なり。

ホ つながれて眠らむとする牛の顏にをりをりさはる青柳の絲。

二 次の動詞に、受身・可能の助動詞を續けて短文を作りなさい。

越ゆ。 答ふ。 堪ふ。 通す。

三 使役の助動詞

使役の助動詞

病人に藥を飲ます。

大工に家を建てさす。

小使に黑板の字を消さしむ。

右の例の傍線を施した助動詞**す・さす・しむ**は、動作を他人にさせる意味を表すから、これを**使役**の**助動詞**といふ。

すは、四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用動詞の未然形に、**さす**は、その他の活用の動詞の未然形に、**しむ**は、すべての動詞の未然形に接續する。

接續

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ

(動詞の下二段活用に等しい)

崇敬の助動詞

四 崇敬の助動詞

兄上、朝鮮に行かる。

先生は明日出發せらる。

殿下式場に臨ませらる。（せの本形はす）

攝政宮殿下九州に行啓せさせ給ふ。（させの本形はさす）

皇太子御位に即かしめ給ふ。（しめの本形はしむ）

右の例の傍線を施した助動詞る・らる・す・さす・しむは他の動作を尊敬する意味を表してゐる。

謹みて新年を賀したてまつる。

御待ちいたすべし。

御話しまうす事いろいろあり。

本日出發仕り候。

右の例の傍線を施した、たてまつる・いたす・まうす・候などは、本來動詞であるが、ここでは他人に對して、動作を鄭重にいふ意味をあらはす助動詞となつてゐる。

接續

かやうに、他の動作を敬ひ、又は動作を鄭重にいひあらはす時に用ゐられる助動詞を、**崇敬の助動詞**といふ。

る・らる・す・さす・しむが動詞に接續する規定は、受身の助動詞**る・らる**、使役の助動詞**す・さす・しむ**が動詞に接續する規定と同じである。

活用も亦同じである。

本來の動詞から崇敬の助動詞になつたものは、すべて動詞の連用形に接續する。

練習

一　次の文中の助動詞を指摘して、その種類を述べ、接續を說き、且助動詞のどの形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ　陛下御參拜あらせらる。

ロ　父君「汝が首途の祝として舊臣どもに謠をうたはせむ。しばし待て。」とて、兄をしてその用意をさせ給ふ。

ハ　囊中の文書は皆、岩倉公が蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に

起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

ニ 天顔殊に麗しく笑ませ給ふ。

ホ をさな子に矢を拾はせて春の日を弓にくらぜり花の下かげ。

二 次の動詞に、使役、崇敬の助動詞を續けて、短文を作りなさい。

書く。 撃つ。 捧讀す。 起く。

五 時の助動詞

イ 完了の助動詞

今日も暮らしつ。

花咲きぬ。

月、山の端に出でたり。

本を買へり。

右の例の傍線を施した助動詞つ・ぬ・たり・りは動作の完了した意味を表すから、完了の助動詞といふ。

時の助動詞

完了

接續

つ・ぬ・たりは動詞の連用形に接續する。但し、ぬはナ行變格活用の動詞には接續しない。

活用

りは四段活用の動詞の已然形、サ行變格活用の動詞の未然形に接續する。

過去

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	て
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○
り	○	○	り	る	○	○

（動詞の下二段活用に等しい）

（動詞のナ行變格活用に等しい）

（動詞のラ行變格活用に似てゐる）

ロ 過去の助動詞

昨日は雪降りき。

花は皆散りけり。

右の例の傍線を施した助動詞**き**・**けり**は動作の既に過ぎ去つた意味を表すから、これを**過去**の**助動詞**といふ。

◎**き**・**けり**は動詞の連用形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

（特殊の活用）

（動詞の**ラ**行變格活用に似てゐる）

接續活用

きが力行變格活用・サ行變格活用の動詞に續く時には、次のやうな例外がある。

	未然形	連用形
カ變	こ（し）（しか）	き（し）（しか）
サ變	せ（し）（しか）	し―き

ハ未來の助動詞

未來

明日は雨降らむ。

右の例の傍線を施した助動詞**む**は動作が未來に起る意味を表すから、これを**未來**の**助動詞**といふ。

◎**む**は動詞の未然形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○

（特殊の活用）

接續活用

練習

次の文中の助動詞を指摘し、その種類を述べ、接續を說き、且助動詞のどの活用形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 昔この里に一人の男ありけり。

ロ 訪ねつる人はあらず。

ハ 明けぬる空に月殘れり。

ニ 面白く咲きたる櫻を長く折り歸りぬ。

ホ この流派の絶えむことの悲しさよ。

ヘ 草庵や夜の間を降りし秋の雨。

六 打消の助動詞

打消の助動詞

花咲かず。

彼はまだ遠くは行かじ。

その教は一生背くまじ。

接續

右の例の傍線を施した助動詞**ず・じ・まじ**は動作を否定する意味を表すから、これを**打消**の**助動詞**といふ。

活用

ず・じは動詞の未然形に接續する。

まじは動詞の終止形に接續する。但し**ラ**行變格活用の動詞だけには、その連體形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
じ	○	○	じ	○	○	○
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○

（特殊の活用）

（形容詞の**シク**活用に等しい）

七 推量の助動詞

推量の助動詞

なしえざるものあらむ。

接續

いかがしけむ。

しづ心なく花の散るらむ。

御室の山に時雨ふるらし。

山のあなたは雨降るべし。

右の例の傍線を施した助動詞**む・けむ・らむ・らし・べし**は物事を推量する意味を表すから、これを**推量**の**助動詞**といふ。

むは動詞の未然形に接續する。

けむは動詞の連用形に接續する。

活用

らむ・らし・べしは動詞の終止形に接續する。但しラ行變格活用の動詞にはその連體形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
らし	○	らしく	らし	らしき	○	○
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○

（特殊の活用）

（形容詞の**シク**活用に似てゐる）

（形容詞の**ク**活用に等しい）

古文では、此の外に**まし**・**めり**などが用ゐられてゐる。

練習

次の文中の助動詞を指摘し、その種類を述べ、接續を說き且助動詞のどの形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 僞りても賢を學ばむを賢と言ふべし。

ロ 言はずとも明らかなるべき事ならむ。

ハ 花まだ咲くまじく見ゆ。

ニ 雉も鳴かずばうたるまじ。

ホ かなはじとや思ひけむ太刀を捨てて逃げ失せたり。

ヘ 吹きあれて千鳥も鳴かぬ月夜かな。

ト ほととぎす鳴くべき時になりにけりひと日は訪はせ駒迄の里。

ハ　指定の助動詞

學科は國語なり。

花の散りくるなり。

そは汝の惡しきなり。

君君たり、臣臣たり。

右の例の傍線を施した助動詞なり、たりは物事を指定する意味を表すから、これを**指定**の助動詞といふ。

接續　なりは體言及び動詞・形容詞の連體形に接續する。

活用　たりは體言にのみ接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	○
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

（動詞のラ行變格活用に等しい）

九　咏歎の助動詞

咏歎の助動詞

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。
見渡せば花も紅葉もなかりけり。

接續

右の例の傍線を施した助動詞なり・けりは咏歎の意味を表すから、これを咏歎の助動詞といふ。

なりは動詞の終止形に接續する。但しラ行變格活用の動詞にはその連體形に接續する。

活用　けりは、すべての動詞の連用形に接續する。けりの接續の規定は過去の助動詞けりと同樣である。そこで、用ゐられた、けりが過去か咏歎かは、その時々で判斷するより外は無い。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

（ラ行變格活用に似てゐる）

一〇　希望の助動詞

希望の助動詞

一日も早く行きたし。

右の例の傍線を施した助動詞たしは、物事を希望する意味を表すから、これを希望の助動詞といふ。

接續　たしは動詞の連用形に接續する。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	○

（形容詞のク活用に等しい）

二 比況の助動詞

歳月流るるがごとし。

光陰矢のごとし。

歳月流るるごとし。

漕ぎゆく船のあとなきごとし。

右の例の傍線を施した助動詞**ごとし**は、物事をくらべて説明する意を表すから、これを**比況**（ひきやう）の**助動詞**といふ。

ごとしは助詞**が**・**の**及び動詞・形容詞の連體形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

（形容詞のク活用に似てゐる）

比況の助動詞
接續
活用

練習

次の文中の助動詞を指摘し、その種類を述べ、接續を説き、且助動詞のどの形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 身、王侯たれども驕らず。

ロ 今朝のごとき地震は、近ごろ稀なり。

ハ 競馬遲れし一騎あはれなり。

ニ 聞くがごとくば水害甚だしかりしと。

ホ 大原女がいただく柴も濡れにけり北山あたり時雨しぬらむ。

ヘ 花見にも行きたく、講演會にも行きたし。

以上説明したやうに、助動詞はその意味の上から十一種に分けられるが、活用の型から見る時は次のやうに分けられる。

一 動詞型活用のもの

イ 下二段型活用のもの

活用 種類	未然形	連體形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
受身 尊敬 可能	れ られ	れ られ	る らる	るる らるる	るれ らるれ	れ られ	可能の場合は命令形がない
使役 尊敬	せ させ しめ	せ させ しめ	す さす しむ	する さする しむる	すれ さすれ しむれ	せ させ しめ	
時(完了)	て	て	つ	つる	つれ	て	

ロ 良行變格型活用のもの

活用 種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
時(完了)	たら	たり	たり	たる	たれ	○	
時(過去)	○ ○	○ ○	り けり	る ける	○ けれ	○ ○	

活用 種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
指定	なら たら	なり たり	なり たり	なる たる	なれ たれ	○ たれ	
咏歎	○ ○	○ ○	なり けり	なる ける	なれ けれ	○ ○	

ハ 奈行變格型活用のもの

活用 種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
時(完了)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	

ニ 形容詞型活用のもの

活用 種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
可能 推量	べく	べく	べし	べき	べけれ	○	
打消	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	

たし	希望	たく	たく	たし	たき	たけれ	○		
ごとし	比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○		

三 特殊の活用をするもの

活用 ＼ 種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
き むき 時(過去) 時(未來)	○ ○	○ ○	き む	し む	しか め	○ ○	むはんとも書く
む けむ らむ 推量	○ ○ ○	○ ○ ○	む けむ らむ	む けむ らむ	め けめ らめ	○ ○ ○	むはん けむはけんとも書く らむはらんとも書く
らし 推量	○	らしく	らし	らしき	○	○	
じ 打消	ず○	ず○	ず	ぬ○	ね○	○○	

練習

一 次の文中活用ある語を指摘して、活用させて見なさい。

イ 余等の一たび掩壕に入るや、初より生を期せず。然るに今正月元旦、滿山盡く旭旗の飜るを見ては、いひ知らぬ感に打たれて覺えず涙を催せり。

ロ 人の香といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらむことを人々に求め候ひき。

ハ 金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。

ニ もとより手細工にせし事にはあれど、聊か資本もかかりたり。この分にては水も飲まれ申さずとかこちけり。

ホ 呼びにやりし友より呼びにおこせけり雨はいづこも寂しかるらむ。

二 次の表を作つてみなさい。

イ 動詞の未然形に續く助動詞

ロ 動詞の連用形に續く助動詞

ハ 動詞の終止形に續く助動詞

ニ 動詞の連體形に續く助動詞
ホ 動詞の已然形に續く助動詞

第六節　口語助動詞の種類・接續及び活用

一 受身の助動詞

受身の助動詞

人からよく言はれる。
先生から注意せられる。

接續

れるは四段活用の動詞の未然形に續き、られるはその他の活用の動詞の未然形に續く。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られ

（動詞の下一段活用に等しい）命令形には助詞よ、又はろを附けて用ゐる。

練習

次の動詞に受身の助動詞を續けて短文を作りなさい。
育てる。蹴る。打つ。する。

二 可能の助動詞

可能の助動詞

この本は一日に讀まれる。
ここから充分に見られる。

接續

動詞に接續する規定は受身の助動詞れる・られるが、動詞に接續する規定と同じである。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	○
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	○

受身の助動詞と異るのは命令形を缺いてゐる點である。

この助動詞は又動作の自然に起つて止められぬ意味を表す場

自發の助動詞

合にも使ふ。その時は特に**自發の助動詞**といふ。

例。效用の廣いのに驚かれる。

兄のことが考へられる。

練習

次の動詞に可能、自發の助動詞を續けて、短文を作りなさい。

生きる。着る。來る。勉强する。行く。

使役の助動詞

三 使役の助動詞

今日は休ませる。

試驗を受けさせる。

接續

せるは四段活用の動詞の未然形に續き、**させる**はその他の活用の動詞の未然形に續く。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させ

（動詞の下一段活用に等しい）命令形には助詞**よ**又は**ろ**をつけて用ゐる。

練習

次の動詞に使役の助動詞を續けて短文を作りなさい。

書く。捨てる。消す。準備する。

崇敬の助動詞

四 崇敬の助動詞

校長先生がかう言はれる。

ベルが鳴つて、先生は教壇をおりられる。

私も行きます。

接續

れる・られるが動詞に接續する規定は、受身の助動詞**れる・られる**が動詞に接續する規定と同じで、その活用も兩者同じである。

ますは、すべての動詞の連用形に接續する。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ まし

（特殊の活用）

練習

次の動詞に崇敬の助動詞を續けて短文を作りなさい。

好む。　出發する。　起きる。　差上げる。

時の助動詞

完了

過去

接續

五　時の助動詞

イ　完了と過去

今、十時が鳴つた。（完了）

昨夜、雨が降つた。（過去）

文語では完了の助動詞と過去の助動詞とは別であるが、口語では、完了も過去も共に助動詞たの一つで表してゐる。

たはすべての動詞の連用形に接續する。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
た	たら	たり	た	た	たら	○

（特殊の活用）

練習

次の動詞に助動詞たを續けて短文を作りなさい。

咲く。　見る。　尋ねる。　學ぶ。

未來

接續

ロ　未來の助動詞

明日は雪が降らう。

明日は雨が霽れよう。

うは四段活用の動詞の未然形に接續し、ようはその他の活用の動詞の未然形（佐行變格活用動詞の未然形はしの方）に接續する。

打消の助動詞

ハ　打消の助動詞

う・ようは終止形だけしか使はれてゐない。

何も見えぬ。　誰も來ない。

花はまだ咲くまい。　夜はまだ明けまい。

ぬ・ないはすべての動詞の未然形に接續し、**まい**は四段活用の動詞の終止形、及び四段活用以外の活用の動詞の未然形(佐行變格活用動詞の未然形は**し**・の方)に接續する。

接續

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ぬ	○	ず	ぬ	ぬ	ね	○
ない	○	なく	ない	ない	なけれ	○
まい	○	○	まい	まい	○	○

(特殊の活用)

(形容詞の**ク**活用に似てゐる)

(特殊の活用)

練習

次の動詞に打消の助動詞を續けて短文を作りなさい。

降る。　延びる。　干る。　受ける。　くる。

推量の助動詞

活用

七　推量の助動詞

あちらでは雪が降つてゐるであらう。

あの店にも賣つてゐよう。

月が出るらしい。

うは四段活用の動詞の未然形に接續し、**よう**はその他の活用の動詞の未然形(佐行變格活用動詞の未然形は**し**・の方)に接續し、**らしい**はすべての動詞の終止形に接續する。

う・ようは終止形だけしか使はれてゐない。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○

(形容詞の活用に類する)

練習

次の動詞に推量の助動詞を續けて短文を作りなさい。

散る。ゐる。明ける。運動する。

八 指定の助動詞

こんどの時間は國語だ。

正成は忠臣です。

だ・ですは體言の下に續く。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
だ	○	○	だ	だ	○	○
です	でせ	でし	です	です	○	○

（特殊の活用）

指定の助動詞

接續

活用

九 希望の助動詞

今日も行きたい。

たいはすべての動詞の連用形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○

（形容詞のク活用に等しい）

希望の助動詞

接續

活用

練習

次の動詞に希望の助動詞を續けて短文を作りなさい。

見る。取る。讀む。染める。

文語の比況の助動詞**ごとし**に相當する口語の助動詞は無いが、通例は名詞**やう**に指定の助動詞**だ・ですを**結びつけたものを用ゐる。

例　花が雪のやうだ。

歳月は流れるやうです。

以上述べた口語の助動詞は、活用の型から見て、次のやうに分けられる。

一 下一段動詞型活用のもの

活用種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
受身 可能 崇敬	れ られ れ	れ られ れ	れる られる れる	れる られる れる	れれ られれ れれ	れ られ れ	可能の場合は命令形を缺く
使役 崇敬	せ させ せ	せ させ せ	せる させる せる	せる させる せる	せれ させれ せれ	せ させ せ	

二 形容詞型活用のもの

活用種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
らしい	推量	○	らしく	らしい	らしい	○	○	
たい	希望	○	たく	たい	たい	たけれ	○	
ない	打消	○	なく	ない	ない	なけれ	○	

三 特殊の活用をするもの

活用種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
ぬ	打消	○	ず	ぬ	ぬ	○	ぬはんとも書く
まい	打消	○	○	まい	まい	○	○	
ます	崇敬	ませ	まし	ます	ますれ	ませまし		
た	時（完了過去）	たら	たり	た	たら	○		
だ	指定	○	○	だ	だ	○		
です	指定	でせ	でし	です	です	○	○	

練習

一 次の文中の助動詞を指摘し、その種類を述べ接續を說き、助動詞のどの活用形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに、幾筋もたな引いて、田圃から岡まで屆かうとしてゐる。

ロ「泣かぬなら殺してしまへ時鳥」これは信長の氣質を譬へた句だと言はれてゐるが、實際彼は隨分短氣であつたらしい。

ハ先帝はかく萬機の政を聞しめされながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

二 次の表を作つてみなさい。

イ動詞の未然形に續く口語助動詞。

ロ動詞の連用形に續く口語助動詞

ハ動詞の終止形に續く口語助動詞

第四章 助詞

第一節 體言に續く助詞

體言の下に續く助詞には

が・の・に・を・へ・と・より・から・まで等がある。

この中で特に注意すべきものに就いて略説する。

に(に)* (*括弧内は口語の助詞。以下同様)

文語

上野驛に着きたり。

右の例のやうに、には動作の歸着點を示すのに用ゐられる。

へ(へ・に)

文語

東の方へ行く。

口語

東の方へ行く。

東の方に行く。

學校へ行く。

學校に行く。

右の例のやうに、へは文語では動作の進行する方向を示すのに用ゐられ、口語では動作の進行する方向を示すと共に、動作の歸着

點を示すにも用ゐられる。即ち口語では、にとへとを區別せずに使つてゐる。

と（と）

月と花とを賞す。

松島と天の橋立と嚴島とを日本の三景といふ。

事物を竝列する時は、右のやうにその一々の下にとを添へるのであるが、誤解を生じない限り、最終の語句の下のとは省いてもよい。

例　月と花を賞す。

京都と大阪と神戸へ行つた。

但し次のやうな場合には之を省くことは出來ない。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

第二節　動詞・形容詞・助動詞に續く助詞

この種の助詞には

ば・と・とも・ど・ども・に・を・が・て・で・つつ・ながら・ばや・なむ・な等がある。

この中で特に注意すべきものに就いて略説する。

ば（ば・ので・から）

文語

一　雨降らば行かじ。
二　雨降れば行かず。
一　水清くば飲まむ。
二　水清ければ魚住まず。

右の例の一のやうに、文語では、未然形に續いたばは假定の條件を表し、二のやうに已然形に續いたばは確定の條件を表す。

口語

イ　雨が降れば行くまい。
ロ　雨が降れば行かない。
イ　水が清ければ飲まう。
ロ　水が清ければ魚は住まない。

口語では已然形の下に附けたばでィ假定條件ロ條件が已になりたつたものと假定する場合を表す。

口語では、確定の條件は多く終止形にので・からを添へて表す。

風が吹くので花が散る。

風が吹くから花が散る。

ので・から

とも（ても）

とも

文語

悔むとも及ばじ。

風吹かずとも花散らむ。

悲しくとも忍ばむ。

右の例のやうに文語のともは動詞の終止形、形容詞の未然形に續いて假定の條件を表し、口語のてもは動詞・形容詞の連用形に續いて假定の條件を表す。（助動詞との結びつき方は、動詞・形容詞に

準じて、考へてよろしい。以下皆これに同じい。）

ど・ども（けれど・けれども）

文語

悔め{ど／ども}そのかひなし。

風吹かね{ど／ども}花散れり。

悲しけれ{ど／ども}忍べり。

口語

悔む{けれど／けれども}そのかひはない。

風は吹かない{けれど／けれども}花が散つた。

悲しい{けれど／けれども}忍んだ。

右の例のやうに文語のど・ども活用する語の已然形に續いて確定の條件を表し、口語のけれど・けれども活用する語の終止形に續いて確定の條件を表す。

練習

次の文に誤があつたら正しなさい。又、全文を口語に直しなさい。

イ 同じ罪に行はるるとも後悔せじ。

ロ 日落ちて後宿へ着きたり。

ハ 高橋と小島の弟は同級なり。

ニ 風吹けば波立たむ。

ホ 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。

ヘ 見事、かの頭上の林檎を射落せば、汝が命を助けむ。

が・に・を（が・に・のに）

文語

努力せしが效なかりき。

日暮れたるに宿るべき家なし。

花咲きたるに未だ寒し。

いそがずばぬれざらまし

口語

努力したが效がなかつた。

努力したのに效がなかつた。

日が暮れたのに宿る家もない。

花が咲いたのにまだ寒い。

が・に・を

を旅人のあとよりはるる野路の村雨。

右の例のやうに**が・に・を**は活用する語の連體形に續いて確定の條件を表し同時にその條件とは反對の結果が下に起ることを表す。

をは文語に限つて用ゐられる。

口語では、**のに**を用ゐることが多い。**のに**は活用する語の連體形に續く。

て・で（て・ないで）

文語

日暮れて道遠し。

何事も言はで止みぬ。

右の例のやうに、**て**は活用する語の連用形に續いて語句接續の

口語

日が暮れて道が遠い。

何事も言はないで止めた。

用をなし、では活用する語の未然形に續いて、打消の意を表して語句を接續する。

では打消の助動詞ずと助詞てとの結びついたずての音の變化したものである。

文語のでを用ゐる場合に口語ではないでを用ゐる。ないでは活用する語の未然形に續く。

ばや・なむ

ばや・なむ。

早く都に歸らばや。

今一度の御幸待たなむ。

右の例のやうに、ばや・なむは願望の意味を表し、動詞の未然形に續く。

な

な（な）

文語

口語

怠りて過すな。

危きに居るな。

怠つて過をするな。

危いところに居るな。

右の例のやうに、なは禁示の意味を表し、動詞・助動詞の終止形に續く。（ラ行變格活用の動詞には、その連體形に續く。）

この外、古文では「な……そ」の形で禁示の意味を表すが、現代文では餘り使はれない。

春な忘れそ。

な折りそ。

第三節　種々の語に續く助詞

この種の助詞には

は・も・ぞ・なむ・こそ・や・か・ばかり・のみ・だに・さへ・すら・かな・よ・かし等がある。

ぞ

係詞

此の中で特に注意すべきものに就いて略説する。

ぞ（ぞ）

文語

そは何ぞ。

汝は何物なるぞ。

我は知らぬぞ。

口語

僕は行かないぞ。

右の例のぞは、文の終に有つて物事を強く指示し、或は餘情を添へる意を表す。ぞが活用する語に續く時は、その連體形を受ける。

花ぞ流るる。

鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき。

右の例のぞは物事を強く指示する意を表すと共に、文の結に關係を持つてゐる。即ちこの時は文を活用する語の連體形で結ぶ。

このやうに文の結に關係を及ぼす語を係詞（かかりことば）といひ、これに應じて

結詞

なむ

こそ

文を結ぶ語を結詞（むすびことば）といひ、この關係を係結（かかりむすび）といふ。

なむ。

人と爭はざるなむ賢き。

花なむ美しき。

右の例のやうに、なむは物事を強く指示する意を表し、文の係詞となつてゐる。此の時、文は活用する語の連體形で結ぶ。

こそ（こそ）

文語

それこそ大事なれ。

花こそ散りしか。

右の例のやうにこそはぞなむより一層強く物事を指示する意を表す。文語のこそは文の結に關係を及ぼし、下を活用する語の已然形で結ぶ。口語のこそは文の結には關係を及ぼさない。

口語

それこそ大變だ。

や

おもしろき事ありや。

かかる事ありやなしや。

知るや知らずや。

右の例のやは疑問の意味を表し、活用する語の終止形に續いたものである。

人やある。

花や咲きし。

物やかなしき。

右の例のやは疑問の意味を表すと同時に、文の係となつてゐる。

この時、文は活用する語の連體形で結ぶ。

悔ゆともかひあらむや。

かくてやはあるべき。

右の例のやは反語の意味を表してゐる。

か（か）

文語

かかる事あるか。

いづれに賛成するか。

落書したるは誰か。

右の例のかは文の終に用ゐられ、文語でも口語でも體言又は活用する語の連體形に續いて、疑問の意を表してゐる。

口語

どちらに賛成するか。

落書したのは誰か。

文語

誰かある。

春と秋といづれかよき。

右の例のかは疑問の意味を表すと同時に文の係となつてゐる。

この時、文は活用する語の連體形で結ぶ。

だに・すら

さへ

文語

今は何をか思はむ。

右の例のかは反語の意味を表してゐる。

だに・すら（さへ）

文語

鳥にだにしかず。

禽獸すら恩を知れり。

右の例のやうに、文語のだには大體輕い方を擧げて重い方を言外に思はせる意味を表し、文語のすらは大體一事をあげて他を類推させる意味を表してゐる。文語のだに・すらに相應するところを口語では、さへの一語で表してゐる。

さへ（さへ・まで）

文語

口語

今になつて何を思ふもんですか。

口語

鳥にさへ及ばない。

禽獸さへ恩を知つてゐる。

口語

かな

よ

雨降り風さへ吹く。

涙をさへ落したり。

右の例のやうに、さへは大體物事の上に更に或る物事の添ひ加はる意味を表してゐる。口語ではさへの外にまでを用ゐる。

かな。

見ぐるしき振舞かな

あゝ悲しいかな。

右の例のやうにかなは感動の意味を表し、體言又は活用する語の連體形に續く。

よ（よ）

文語

よき子よ。

口語

よい子よ。

口語

雨が降つて風さへ／まで吹く。

涙さへ／までながした。

右の例のやうに、よは餘情を添へて呼びかける意を表す。

練習

一　次の文に誤があつたら、それを正し、且全文を口語に直しなさい。又、活用のある語は活用させてみなさい。

イ　親の恩を忘るゝな。

ロ　若し不都合の點あらば、遠慮なく指摘せらるべし。

ハ　昔の旅はさこそ不自由なりけめと思はる。

ニ　瀑の落つる音百雷の鳴りはためくにぞ似たる。

ホ　三度登山しきが、常に天氣よかりき。

ヘ　言はぬは言ふに優りてなむ覺ゆる。言はぬまさりてさてみるもおもしろし。

ト　敵大勢なりとも退かじ。

チ　仰ぎて天に愧ぢず。

リ　風吹けば吹け、何の恐るる事かあるべき。

ヌ　矢盡き刀折るとも退かじ。

ル　用意は整へり、彼だに來なば出發せむ。用意は整へり。彼きへ來たら

ヲ　彼を義人といふべし。

ワ　再び耳を傾けれど何の物音もなかりき。

カ　磯松を今離れたる荒鷲の行方に見ゆる蝦夷の遠山。

二　次の表を作つてみなさい。

イ　活用する語の未然形に續く助詞。

ロ　活用する語の連用形に續く助詞。

ハ　活用する語の終止形に續く助詞。

ニ　活用する語の連體形に續く助詞。

ホ　活用する語の已然形に續く助詞。

第五章　語の構成と品詞の轉成

一　山々。人々。國々。折々。返すがへす。

二　夕日。春雨。物語る。みぐるし。

合成語
疊語
熟語
接辭
接頭辭
接尾辭

右の例のやうに語が二つ以上重つて、文法上一つの語として扱はれるものを**合成語**といふ。

合成語には二種ある。一のやうに同じ語を重ねたものを**疊語**といひ、二のやうに異つた語が合成したものを**熟語**といふ。

イ さ夜。す顔。を笹。み雪　た易し。か細し。

ロ 我ら。法師ばら。春めく。才子ぶる。深み。遠さ。

右の例の傍線を施した語は、獨立しては用ゐられず、他の語に結びついて一語を成すものであるから、**接辭**といふ。接辭には二種ある。**イ**のやうに語の上に結びつくものを**接頭辭**、**ロ**のやうに語の下に結びつくものを**接尾辭**といふ。

一　太郎に文法を教へたり。

二　先生の教へをよく守る。

右の例に於て一の**教へ**は動詞であるが二の**教へ**は名詞となつてゐる。このやうに、品詞が用法によつて他の品詞に轉ずることを**品詞の轉成**といふ。次に例を少しあげる。

品詞の轉成
轉成の名詞
轉成の代名詞
轉成の形容詞

轉成の名詞

一　動詞から轉成したもの。

笑。光。眺。謠。茂(人名)　勝(人名)

二　形容詞から轉成したもの。

鮓。燈。

厚み。深み。重さ。高さ。(これは形容詞の語幹に接尾辭**み**・**さ**を添へたのである。)

轉成の代名詞

名詞から轉成したもの。

君。僕。閣下。足下。

轉成の形容詞

一　名詞から轉成したもの。
露けし。　大人（おとな）し。　はなばなし。
二　動詞から轉成したもの。
めでたし。
三　副詞から轉成したもの。
甚だし。　げにげにし。

轉成の副詞

一　名詞から轉成したもの。
つゆ知らず。　ときどき雨降る。
二　動詞から轉成したもの。
たとひ雪になるとも……。
あまり勉強しすぎる。
三　形容詞から轉成したもの。

花美しく咲く。
今日はよく晴れた。
朝早く出かける。

轉成の接續詞

一　名詞から轉成したもの。
都合あしく候間缺席いたしたく候。
二　動詞から轉成したもの。
英語及びフランス語に通ず。

轉成の助動詞

轉成の助動詞は皆動詞から轉成したものである。
給ふ。　申す。　奉る。

第六章　文の成分

主語

述語

主語の構成

文語

一　鳥。飛ぶ。
　　花。咲く。
二　山。高し。
　　月。清し。
三　正成。は。忠臣なり。
　　犬。は。動物なり。

口語

鳥。が。飛ぶ。
花。が。咲く。
山。が。高い。
月。が。清い。
正成。は。忠臣です。
犬。は。動物だ。

右の例の一は「何が、どうする。」二は「何が、どんなである。」三は「何が、何である。」といふ形の文である。この「何が」に當るもの、即ち文の題目を表す語を主語といふ。○をつけた語がそれである。「どうする。」「どんなである。」「何である」に當るもの、即ち題目に就いて敍述を表す語を述語といふ。傍線を施した語がそれである。

主語の構成

述語の構成

文語

鳥。飛ぶ。
風。涼し。
月。は。清し。
我。も。行かむ。

口語

鳥。が。飛ぶ。
風。が。涼しい。
月。は。清い。
僕。も。行かう。

右の例のやうに、主語は體言が單獨に現れる場合と、下に助詞が添はつて現れる場合とある。

文語

言。ふ。は。易く、行。ふ。は。難し。
白。きが美し。

口語

言。ふ。のは易いが、行。ふ。ことはむつかしい。
白。いのが美しい。

右の例のやうに、主語が體言に準ずべき語からなることもある。

述語の構成

活用連語

文語

一花　咲く。
　山　高し。
二花　咲きたり。
　月　清かりき。

口語

花が　咲く。
山が　高い。
花が　咲いた。
月が　よかつた。

右の例のやうに、述語は普通に用言からなり、又は用言に助動詞の添はつたものからなる。**咲きたり**、**清かりき**のやうに、異なつた品詞の連なつて成る語の活用するものを**活用連語**といふ。

文語

彼は何人ぞ。
彼は音樂家なり。
（白きは花の流るるなり）
君君たり。

口語

彼は何人か。
彼は音樂家です。
（白いのは花の流れるのだ。）
君は君だ。

主語ハ何ノ。
補語ハ何ニ。

補語

光陰矢の如し
（歳月は流るる（が）如し。）
右の例のやうに、述語は體言と助詞との連語、體言と指定の助動詞**なり**・**たり**、比況の助動詞**如し**との連語から成ることがある。

文語

犬夜を守る。
太郎級長となる。
犬人にうたる。

口語

犬が夜を守る。
太郎が級長となる。
犬が人にうたれる。

右の例で、「犬…守る。」「太郎…なる。」というやうに主語と述語とだけでは、まとまつた思想を表す事が出來ない。「**夜を**」「**級長と**」などの語が補はれて、始めてその意味が明瞭となる。かやうに述語の意味を補うて、文意を全うする語を**補語**といふ。

補語は主として體言に助詞**に**・**を**・**と**・**より**などが結びついた連語

光陰は矢のやうだ。
（歳月は流れるやうだ。）

から成る。

文語　一白き花。咲く。　二山甚だ高し。

口語　白い花。が咲く。　山が大變高い。

右の例に於て白きは花。を修飾し、甚だは高し。を修飾してゐる。

かやうに、文中にあつて他の語を修飾する語を修飾語（しうしよくご）といふ。

一のやうに體言を修飾するものを形容詞的修飾語、二のやうに用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

修飾語

形容詞的修飾語の構成

形容詞的修飾語の構成

文語　我が庭。に古き松。あり。　散る花。を惜しむ。　健全なる精神。は健全なる

口語　僕の庭。に古い松。がある。

身體。に宿る。　鏡の如き明月。空にあり。　我が軍。敵の軍。を破る。

鏡のやうな月。が空にかかつてゐる。

右のやうに、形容詞的修飾語は主として形容詞・動詞の連體形・又は活用連語の連體形、若しくは體言に助詞の・がの添はつた連語から成る。

副詞的修飾語の構成

副詞的修飾語の構成

文語　風いよいよ強し。　船遠く去る。　大河洋々として流る。

口語　風がますく烈しい。　兄は今朝東京へ出發した。

右の例のやうに、副詞的修飾語は副詞若しくは副詞に準ずる語から成つてゐる。

主語も述語も補語も修飾語も二つ以上重ねて用ゐられることがある。次にその例を示す。

主語の併置

文語

太郎・次郎・三郎はよく父母の教へを守る。

父も母も兄も弟も健全なり。

口語

梅も櫻も桃もひらく。

朝も晩も涼しい。

述語の併置

文語

太郎はよく勉めよく遊ぶ。

植物は發育し、生長し、繁殖し、枯死す。

口語

これは新しくて美しい。

彼は文學者で政治家である。

補語の併置

文語

先生、生徒に文法を教ふ。

彼は數學、國語、圖畫を好めり。

口語

太郎は犬にポチと名づけた。

友人は僕にたびたび手紙をくれた。

形容詞的修飾語の併置

文語

大きく赤き椿咲く。

子たり弟たる道をつくせ。

口語

高くて嶮しい山を登る。

魚のやうな、獸のやうな動物。

副詞的修飾語の併置

文語

海青く黑く見ゆ。

椿の花大きく美しく咲く。

口語

簡單に明瞭に說明しなさい。

遠山の櫻は雲か霞のやうに見。

獨立語

あはれ　感語　同趣　情

獨立語

文語

文學を修め且つ武道を習ふ。

あはれ、今年も暮れぬ。

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ……

右の例の、**且つ**・**それに**(接續の言葉)、**あはれ**・**ああ**(感歎の言葉)**爾**・**太田君**(呼びかけの言葉)などは、前に述べた文の成分(主語・述語・補語・修飾語)からは獨立してゐる。かやうなものを一括して**獨立語**(どくりつご)といふ。

口語

彼は學問が出來る、それに身體も丈夫だ。

ああ花が咲いた。

太田君、あれを見たまへ。

える。

中等國文典 初學年用 終

第一表

指示代名詞		
事物	場所	方向
こ・これ(文) これ(口)	こゝ(文口)	こち(文) こなた(文) こつち(口) こちら(口)
そ・それ(文) それ(口)	そこ(文口)	そち(文) そなた(文) そつち(口) そちら(口)
か・かれ(文) あ・あれ(文) あれ(口)	かしこ(文) あそこ(口) あすこ(口)	あち(文) かなた(文) あなた(文) あつち(口) あちら(口)
いづれ(文) なに(文口) どれ(口)	いづこ(文) いづく(文) どこ(口)	いづち(文) いづかた(文) どつち(口) どちら(口)

第一表

代名詞一覽表

人代名詞

	自稱	對稱	他稱 近稱	他稱 中稱	他稱 遠稱	他稱 不定稱
	わ・われ（文）	な・なれ（文）	こ（文）	そ（文）	か・かれ（文）	た・たれ（文）
	おのれ（文）	なんぢ（文）	これ（口文）	それ（口文）	あれ（口文）	だれ（口）
	わたくし（口文）	そなた（口文）	このかた（口）	そのかた（口）	あのかた（口）	どのかた（口）
	わたし（口）	あなた（口）				どなた（口）
		おまへ（口）	このひと（口）	そのひと（口）	あのひと（口）	どのひと（口）

指示代名詞

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ・これ（文） これ（口）	そ・それ（文） それ（口）	か・かれ（文） あ・あれ（文） あれ（口）	いづれ（文） なに（口文） どれ（口）
場所	こゝ（口文）	そこ（口文）	かしこ（文） あそこ（口） あすこ（口）	いづこ（文） いづく（文） どこ（口）
方向	こち（文） こなた（文） こつち（口） こちら（口）	そち（文） そなた（文） そつち（口） そちら（口）	あち（文） かなた（文） あなた（文） あつち（口） あちら（口）	いづち（文） いづかた（文） どつち（口） どちら（口）

カ行上二段

朽過生

ちぎき

ちぎき

つぐく

つぐる

つぐれ

ちぎきよ

タ行上一段

朽過生

ちぎき

ちぎる

ちぎる

ちぎれ

ちぎれ

ちぎれ

動詞活用一覽表

文語

活用の種類	語幹	語尾 未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ行四段	行	か	き	く	く	け	け
ガ行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
サ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ
タ行四段	打	た	ち	つ	つ	て	て
ハ行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
バ行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
マ行四段	讀	ま	み	む	む	め	め
ラ行四段	去	ら	り	る	る	れ	れ
良行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
奈行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
カ行上二段	生	き	き	く	くる	くれ	きよ
ガ行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
タ行上二段	朽	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
ダ行上二段	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
ハ行上二段	強	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
バ行上二段	延	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
マ行上二段	夢	み	み	む	むる	むれ	みよ
ヤ行上二段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ラ行上二段	懲	り	り	る	るる	るれ	りよ
ア行上一段	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
カ行上一段	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
ナ行上一段	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ

口語

活用の種類	語幹	語尾 未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ行四段	行	か	き	く	く	け	け
ガ行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
サ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ
タ行四段	打	た	ち	つ	つ	て	て
ハ行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
バ行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
マ行四段	讀	ま	み	む	む	め	め
ラ行四段	去	ら	り	る	る	れ	れ
ラ行四段	有	ら	り	る	る	れ	れ
ナ行四段	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
カ行上一段	生	き	き	きる	きる	きれ	きろよ
ガ行上一段	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎろよ
タ行上一段	朽	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちろよ
ダ行上一段	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢろよ
ハ行上一段	強	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひろよ
バ行上一段	延	び	び	びる	びる	びれ	びろよ
マ行上一段	夢	み	み	みる	みる	みれ	みろよ
ヤ行上一段	報	い	い	いる	いる	いれ	いろよ
ラ行上一段	懲	り	り	りる	りる	りれ	りろよ
ア行上一段	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いろよ
カ行上一段	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きろよ
ナ行上一段	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	にろよ

第二表

動詞活用一覽表

文語

活用の種類	語幹	語尾 未然	語尾 連用	語尾 終止	語尾 連體	語尾 已然	語尾 命令	佐行變格	加行變格	カ行下一段	ワ行下二段	ラ行下二段	ヤ行下二段	マ行下二段	バ行下二段	ハ行下二段	ナ行下二段	ダ行下二段	タ行下二段	ザ行下二段	サ行下二段	ガ行下二段	カ行下二段	ア行下二段
カ行四段	行	か	き	く	く	け	け	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ガ行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
サ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
タ行四段	打	た	ち	つ	つ	て	て	て	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ハ行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ	へ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
バ行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ	べ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
マ行四段	讀	ま	み	む	む	め	め	め	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ラ行四段	去	ら	り	る	る	れ	れ	れ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
良行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ	れ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
奈行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
カ行上二段	生	き	き	く	くる	くれ	きよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ガ行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
タ行上二段	朽	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ダ行上二段	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ハ行上二段	強	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
バ行上二段	延	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
マ行上二段	夢	み	み	む	むる	むれ	みよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ヤ行上二段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ラ行上二段	懲	り	り	る	る	れ	りよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ア行上一段	(射)	い	き	い	いる	いれ	いよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
カ行上一段	(着)	き	き	く	くる	くれ	きよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ナ行上一段	(煮)	に	に	ぬ	ぬる	ぬれ	によ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ハ行上一段	(干)	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
マ行上一段	(見)	み	み	む	むる	むれ	みよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ワ行上一段	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え

口語

活用の種類	語幹	語尾 未然	語尾 連用	語尾 終止	語尾 連體	語尾 已然	語尾 命令	佐行變格	加行變格	カ行下一段	ワ行下一段	ラ行下一段	ヤ行下一段	マ行下一段	バ行下一段	ハ行下一段	ナ行下一段	ダ行下一段	タ行下一段	ザ行下一段	サ行下一段	ガ行下一段	カ行下一段	ア行下一段
カ行四段	行	か	き	く	く	け	け	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ガ行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
サ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
タ行四段	打	た	ち	つ	つ	て	て	て	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ハ行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ	へ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
バ行四段	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ	べ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
マ行四段	讀	ま	み	む	む	め	め	め	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ラ行四段	去	ら	り	る	る	れ	れ	れ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ラ行四段	有	ら	り	り	る	れ	れ	れ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ナ行四段	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
カ行上一段	生	き	き	く	くる	くれ	きよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ガ行上一段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
タ行上一段	朽	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ダ行上一段	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ハ行上一段	強	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
バ行上一段	延	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
マ行上一段	夢	み	み	む	むる	むれ	みよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ヤ行上一段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ラ行上一段	懲	り	り	る	る	れ	りよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ア行上一段	(射)	い	き	い	いる	いれ	いよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
カ行上一段	(着)	き	き	く	くる	くれ	きよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ナ行上一段	(煮)	に	に	ぬ	ぬる	ぬれ	によ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ハ行上一段	(干)	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
マ行上一段	(見)	み	み	む	むる	むれ	みよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え
ワ行上一段	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ	せ	こ	け	ゐ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え

完	消打	
つ	まじ じ ず	しむ
て	まじく ○ ず	しめ
て	まじく ○ ず	しめ
つ	まじ じ ず	しむ
つる	まじき ○ ぬ	しむる
つれ	まじけれ ○ ね	しむれ
て(ま)	○ ○ ○	しめ(ま)
	まい ない ぬ	
	○ ○ ○	
	○ なく ず	
	まい ない ぬ	
	まい ない ぬ	
	○ なけれ ね	
	○ ○ ○	

助動詞活用一覽表

種類		未然	連用	終止・連體	已然	命令
受身	文語	る らる	れ られ	る らる	れ られ	れ られ（よ）
	口語	れる られる	れ られ	れる られる	れ られ	れ られ（ろよ）
可能	文語	る らる べし	れ られ べく	る らる べし	るる らるる べき	るれ らるれ べけれ
	口語	れる られる	れ られ	れる られる	れる られる	れれ られれ
使役	文語	す さす しむ	せ させ しめ	す さす しむ	する さする しむる	すれ させ しむれ
	口語	せる させる	せ させ	せる させる	せる させる	せれ させれ
崇敬	文語	る らる す さす しむ	れ られ せ させ しめ	る らる す さす しむ	るる らるる する さする しむる	るれ らるれ すれ させ しむれ
	口語	れる られる ます	れ られ ます	れる られる ます	れる られる ます	れれ られれ ますれ ませ ましれ
打消	文語	ず じ まじ	ず ○ まじく	ず じ まじ	ぬ ○ まじき	ね ○ まじけれ
	口語	ぬ ない まい	ず なく ○	ぬ ない まい	ぬ ない まい	ね なけれ ○
完了	文語	つ ぬ たり り	て な たら	て に たり り	つる ぬる たる る	つれ ぬれ たれ れ
	口語	た	たり	た	た	たら
過去	文語	けり き	○ ○	○ ○	ける し	けれ しか
	口語	た	たり	た	た	たら
未來	文語	む	○	む	む	め
	口語	う よう	○ ○	う よう	○ ○	○ ○

第三表

助動詞活用一覽表

種類		未然	連用	終止・連體	已然	命令
受身	文語	る らる	れ られ	る らる	れ られ	れ(よ) られ(よ)
	口語	れる られる	れ られ	れる られる	れ られ	れ(ろよ) られ(ろよ)
可能	文語	る らる べし	れ られ べく	る らる べし	る らるる べき	○ ○ ○
	口語	れる られる	れ られ	れる られる	れる られる	れ られ
使役	文語	す さす しむ	せ させ しめ	す さす しむ	する さする しむる	せ(よ) させ(よ) しめ(よ)
	口語	せる させる	せ させ	せる させる	せる させる	せ(ろよ) させ(ろよ)
崇敬	文語	る らる す さす しむ	れ られ せ させ しめ	る らる す さす しむ	る らるる する さする しむる	れ(よ) られ(よ) せ(よ) させ(よ) しめ(よ)
	口語	れる られる ます	れ られ ます	れる られる ます	れる られる ます	れ られ ませ まし
打消	文語	ず じ まじ	ず ○ まじく	ず じ まじき	ぬ ○ まじけれ	○ ○ ○
	口語	○ ない まい	○ なく ○	ぬ ない まい	ぬ なけれ ○	○ ○ ○
時 完了	文語	つ ぬ たり り	て な たら ○	て に たり ○	つる ぬる たる る	て(よ) ね ○ ○
	口語	た	たり	た	た	たら ○
時 過去	文語	けり き	○ ○	○ ○	ける し	けれ しか
	口語	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
時 未來	文語	む	○	む	む	め
	口語	○	○	○	○	○
推量	文語	む らむ らし べし けむ	○ ○ らしく べく ○	○ ○ らし べし けむ	む らむ らしき べき けむ	め ○ べけれ けめ
	口語	う よう らしい	○ ○ ○	う よう らしい	う よう らしい	○ ○ ○
指定	文語	なり たり	なら たら	なり たり	なる たる	なれ たれ
	口語	だ です	○ でせ	○ でし	だ です	○ たれ
希望	文語	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ
	口語	たい	○	たく	たい	たい	たけれ
詠歎	文語	なり けり	○ ○	○ ○	なる ける	なれ けれ
	口語	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
比況	文語	ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○
	口語						○

第四表

文語動詞助動詞連續一覽表

（*きには特例がある）

活用	奈變	良變	四段	上二段	下二段	上一段	下一段	加變	佐變
未然形に	死な	有ら	行か	生き	受け	着	蹴	來こ	爲せ
	る	す							り
						さす らる			
	しむ じず む								
連用形に	死に	有り	行き	生き	受け	着	蹴	來き	爲し
		ぬ							
	き*	けり つ たり けむ たし							
終止形に	死ぬ	有り	行く	生く	受く	着る	蹴る	來く	爲す
			まじ らむ らし べし なり（咏歎）						
連體形に	死ぬる	有る	行く	生くる	受くる	着る	蹴る	來る	爲る
		まじ らむ らし べし							
	ごとし なり（指定）								
已然形に	死ぬれ	有れ	行け	生くれ	受くれ	着れ	蹴れ	來れ	爲れ
			り						

第五表

口語動詞助動詞連續一覽表

活用	未然形に	連用形に	終止形に
四段活用	行か	行き	行く
上一段活用	着	着	着る
下一段活用	受け	受け	受ける
加行變格活用	來こ	來き	來くる
佐行變格活用	爲せ(し)	爲し	爲する
	れる・せる・う	ます・たい・た	まい
	*よう・*られる・*させる・*まい・ない・ぬ		らしい

(*よう・まいは佐行變格活用動詞の未然形しの方に、*られる・させるはせの方に接續する。)

昭和六年八月拾二日　印刷
昭和六年八月拾四日　發行
昭和六年十一月二十五日　訂正再版印刷
昭和六年十一月二十八日　訂正再版發行

中等學校用　國文典

（定價　金四拾五錢）

著作權所有

不許複製

著者　千田憲
東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地

發行者　塚田六彌
東京市神田區材木町十番地

印刷者　西田里司
東京市神田區材木町十番地

印刷所　文勝社印刷所

發行所　右文書院
東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地
電話小石川三七二三番
振替口座東京七四五二八番

大取次　東京六合館・大阪柳原書店・名古屋川瀨書店

廣島縣立廣島第一中學校

第一學年 參學級

細川芳美

一三
細川

文庫
31
034

広島大学図書
2000044034